



③ 梁



④ 欄間



⑤ 防火設備(左の窓は平常時、右の窓が雨戸設置時)



⑥ 90度回転する戸袋



② 井戸屋形

藍の家の優れた建築様式の一部を紹介

写真① 主屋 通りに面する姿。白しっくい^{しっくい}の壁や木製の格子戸など、商家らしい雰囲気を漂わせています

写真② 井戸屋形 主屋と同時期の明治時代後期に建設された井戸。全体に茶室建築の手法が取り入れられています

写真③ 梁 梁には海水に数年間浸した「塩木^{しおぎ}」と呼ばれる松の木を使っているため、虫も付きにくく、一般的な木材より長持ちします

写真④ 欄間 1階座敷の欄間には「博多東中堅町彫刻師 近藤丑太郎」の署名・捺印^{なつしん}があります

写真⑤ 防火設備 窓や軒下には防火設備が施されています。家の両端には隣家からの延焼を防ぐ^{うだつ}卯建、2階のガラス窓横の壁裏には表面にしっくいを塗っている雨戸が収納されていて、大火事や台風から藍の家を守ってきました

写真⑥ 戸袋 雨戸の溝の直線上に戸袋を作る空間がないため、廊下の端に収納する空間を作り、重ねた雨戸を戸袋ごと収納しています



① 主屋

百二十年の時を経て

～津屋崎千軒民俗館藍の家 百二十周年記念～

明治34年8月に建てられた津屋崎千軒民俗館藍の家(以下、藍の家)。令和3年で建築から120年が経ちました。空き家となり、取り壊しの話が出ながらも、住民たちによる必死の保存活動が実を結び、今日も津屋崎千軒の観光拠点、地域・文化情報の発信地として親しまれています。

今回は、120年もの時間を歩んできた藍の家の建物としての素晴らしさと、その場所を「まちおこしの原点」として活動が続けてきた住民たちの歴史を紹介します。

あ

る12月の晴れた日、津屋崎のまちを訪れると、聞きなじみのあるクリスマスソングが遠くから聞こえてきました。音を頼りに歩いていくと、たどり着いたのは「藍の家」。少しだけ開いた玄関から、弦楽器の音や歌声、拍手が聞こえてきて、コンサート中のにぎやかさがうかがえます。コンサートが終わったことを見計らって中をのぞいてみると、楽しそうに会話をする人たち。自然と招き入れられ、いつの間にか自分も談笑。ゆったりくつろげる、心温まる空間がそこにはありました。

当時の趣を残す建物

染色とその製品を販売する商家だった藍の家は間口、奥行きともに約11メートルの2階建て。「大戸を開けると米を積んだ荷車が裏の蔵まで通った」という三和土^{さんど}の土間が家の半分近くを占めます。一階表は京格子でまとめられ、玄関をはじめ雨戸は珍しい揚げ戸^{あげ戸}になっています。けやきの大黒柱、大きな梁^{はり}、桜材^{さくら}の框^{かまど}など、がっちりとした構造と見事な風格のある建物です。120年を経た現在でも、あ

まり手を加えられておらず、当時の商家の雰囲気をよく残し、津屋崎千軒のにぎわいを今に伝えています。

津屋崎千軒とは

塩田と海上交易によって繁栄した津屋崎のにぎわいの様子を「人家が千軒もあるほどに繁栄しているまちだ」と表現した言葉で「青屋千軒」(関千軒)と並び、津屋崎千軒と称されました。明治時代後期からの陸上交通発達に伴った海運業の衰退や、江戸時代に度重なる大火事に見舞われたことなどから、現在では当時の建物はほとんど残っていません。藍の家周辺など、当時の面影をしのばせる建物は貴重なものとなっています。

国の有形文化財として登録

藍の家は、随所に高い大工技術を見ることができ、優れた建築的価値を持っています。平成19年12月5日には、この主屋と井戸屋形が、その歴史的価値の高さや建築時の姿をよく残していることなどから、国登録有形文化財となりました。

上妻邸を生かせ

津屋崎千軒の面影を守るため 保存活動が始まる

明 治時代末期、塩田が廃止され、海上交易の衰退によって物流の主役が海から陸へと大きく変動していく中で、しばらくは海水浴場として栄えましたが、しだいに商店が減り、古い家^{あらが}は壊れ、あちこちに空き地ができてきました。その流れに抗うべく、立ち上がった住民団体「津屋崎町街並み保存協議会（以下、保存協議会）」。

津屋崎の豊富な資源、自然、歴史文化を子どもたちに残そうと行動を起こした保存協議会の活動に沿って、藍の家の歩みを振り返ります。

失われた街並み 上妻邸解体にストップ

昭和30年代、かつての豪商の家屋はほとんど姿を消し、津屋崎千軒と呼ばれた街並みは失われつつありました。豊村酒造と上妻邸（現在の藍の家）付近は津屋崎千軒の街並みの面影をしのばせる貴重な存在でしたが、平成4年、その上妻邸が解体されるという話が起きてしまいます。

「上妻邸がなくなれば、まちの歴史の証人も減り、貴重な文化財もなくなり、何よりもまちの中心部にぽっかり穴が開き、津屋崎の衰退に拍車がかかることになる」。それを危惧した住民たちが立ち上がり、上妻邸の解体保留を家主に依頼。家主から「町のためなら」と上妻邸の無償提供を受けます。

保存協議会を結成し、他の空き屋も借りて街並み保存の世論を起こそうと、津屋崎町に陳情書や請願書の提出を繰り返しながら活動を広げていきました。

上妻邸の保存に赤信号

街並みに穴を空けないためにも、何とか上妻邸を保存・活用

鍵は自分たちの意志と行動 上妻邸の保存が決定

街並み保存に赤信号がとまりそうなき「保存が実現できるかどうかの鍵を握るのは自分たちの強い意志と、それを示す行動だ」と平成6年3月、上妻邸ほか3カ所を会場とした「津屋崎現代美術展」が開催されました。

また、この美術展だけでなく、津屋崎のまちの中を見てもらおうと、写真同好会や陶芸同好会の作品をシルバークラークや文化会館に展示する「街ぐるみ美術展」も同時開催。地元はもちろん、県外を含めて約2千人の人出があり、大成功で幕を閉じました。こうした活動に町内外の反響も大きく、津屋崎町から上妻邸の保存が承認されました。その後の活用方法は保存協議会に委ねられ、染め物を中心とした利



▲保存協議会の原点となった第1回学習会【平成5年】

したいと、講師を招いた学習会の開催を重ねながら協議、検討を進めていきます。「どう利用するのが上妻邸を最大限生かせるか」「どう利用するのが津屋崎の街並みとまちづくりに最も適しているのか」など、保存協議会会員一人一人の知恵を集め、力を合わせて街並みを守ろうと呼び掛けました。

しかし、活動は順風満帆にはいきません。そうしている間にも古い家を取り壊され、少しずつ失われていく街並み。ある料亭は営業を停止して廃業し、新しい家に建て替わるところも続々と出てきていて、藍の家も、今すぐにも屋根瓦のふき替えが必要な状況でした。

用方法を検討していくことが決定。また、上妻邸の愛称を募集した結果「藍は「愛」にも通じ、親しめて呼びやすく、温かさがあることから「津屋崎千軒民俗館藍の家」に決まりました。

運営費が足りずとも 工夫を凝らしたまちづくり

保存が決まり、屋根のふき替えが終わったものの、会費だけでは運営することができません。節句人形展や珍しい貝の標本展、演劇やコンサートなどのさまざまな催しを開催して収入を得ながら、なんとか運営を続ける日々。助成金で案内看板を制作するなど、工夫を凝らしてまちづくりを進めてきました。

保存から4年後の平成10年、念願叶って、運営費を津屋崎町が負担することに決まりました。

藍の家の歩み

明治34年	・約200年前に創業した旧染物屋（紺屋）の上妻家の住居として、現在の藍の家が建てられる
平成4年	・建築後90年余り経過し、老朽化したことから取り壊されることに。しかし、その歴史的価値の高さと街並み保存のため保存活動が始まる
平成5年	・津屋崎町街並み保存協議会結成
平成6年	・「津屋崎千軒民俗館藍の家」に名称決定
1994	・旧津屋崎町と街並み保存協議会が、藍の家保存・管理に関する協定書に調印
平成14年	・「藍の家運営協議会」と「津屋崎千軒いきいき夢の会」が統合。藍の家の運営は「藍の家部会」の活動となる
平成19年	・主屋と庭園の井戸屋形が国の有形文化財として文化財登録原簿に登録される
2002	・国の有形文化財登録記念コンサート「趙国良胡弓の夕べ」を開催
2007	・NPO法人津屋崎千軒いきいき夢の会から「藍の家保存会」が事業を引き継ぐ
平成20年	・藍の家の土地を市が取得。藍の家保存会が市と連携し、国登録有形文化財藍の家の保存と地域交流を深める活動に努める
2008	



原田活男さん

保存協議会初代会長

▶保存協議会第1回学習会で街並みを案内する柴田治事務局長【平成5年】

津屋崎町は、ふき替え費用は助成すると言っているものの、藍の家の保存・管理に関しては、なかなか首を縦に振りません。すると、家主は「町が引き取らないなら屋根のふき替えは必要ない。梅雨前に家を解く」とご立腹。藍の家の保存が危うくなり、赤信号がともうとしていました。

津屋崎人形師の六代目で、町の教育委員や県観光連盟アドバイザーなど数多くの公職を務めた原田さん。町郷土史研究会会長や町史編集委員なども務め、公私両面で津屋崎のまちづくりに取り組み続けました。

筑前津屋崎人形巧房で活男さんの後を継ぐ、長男の誠さんは「父は保存協議会で行政とのつなぎ役という大切な役を担っていた。『時間が無い』が口癖だった」と、多忙な中、本業の人形師とまちづくりに取り組んでいたことを話してくれました。



①



②



③

①秦信男さんと藍の家の炊事場を補修②節句人形展準備のための絵付け作業③第1回学習会であいさつ

受け継がれる志

みんなでつないだ「まちづくり」と「思い」

会員の高齢化で行動力急減 藍の家の運営に専念

平成10年に藍の家の運営費を町が負担することに決まり、保存協議会を結成して7年の月日が経ちました。この間に、保存協議会の会長を務めた原田活男さんが亡くなるなど、会員の高齢化と相まって行動力が急減し、藍の家の活動を進めていくのがおぼつかなくなってきました。そのため、保存協議会は「藍の家運営協議会」と改名し、藍の家の運営に専念することに決定。

それから、古典芸能やコンサート

の開催、ギャラリートとして各分野の作品展、民話をもと

にした一人芝居の上演など、藍の家は文化発信基地として成長し、年間約3万人の来訪者を迎えられるようになりました。

事務局長の死と まちおこし運動の一本化

「津屋崎といえは藍の家」と言われるほど町内外に広く知られるようになり、大きく成長した藍の家。ところが、精力的に活動を続けてきた藍の家運営協議会の事務局長である柴田治さんが、闘病の末、平成14年に志半ばで亡くなってしまいます。

上妻邸の取り壊しの話が持ち上がったとき「このままではいけない」と声を上げた一人で、保存協議会の発起人となった柴田さん。藍の家運営協議会の会報には「藍の家がここまで成長してきたのは会員の皆さまの絶大なるご支援、ご協力のおかげですが、何よりもまして熱い情熱を藍の家に注いでこられた事務局長の柴田治氏があつたればこそでした。しかし、私たちは今、その強力なリーダーを失ってしまった」と記されています。

柴田さんが願っていたのは、まちおこし運動の一本化。中で

も「津屋崎町を生き活きさせたいと願う、同じ考えの人が一つになって力を合わせよう」と発足した「津屋崎千軒いきいき夢の会（以下、いきいき夢の会）」への統合を願っていました。そして平成14年、いきいき夢の会の中の「藍の家部会」として再出発し、藍の家の運営はいきいき夢の会が引き継ぐことになりました。

受け継いだ遺志 藍の家を文化財に

「私も身を引こうかと悩んだけれど『ここを文化財にするんだ』という主人の遺志を継ぐことが、私の使命ではないかと思った」と話すのは、柴田さんの妻、富美子さん。平成17年、富美子さんは、津屋崎町と福岡町が合併し福津市となったことを機に「藍の家を国の登録文化財に」と思い立ちます。

毎日の掃除や藍染めの勉強、地域へのお知らせなど、藍の家を守る地道な活動は続けてきた

ものの「文化財にすること」に関しては、全く具体的な知識を持っていなかった富美子さん。縁あって知り合った大学の先生の助言を受け、国登録有形文化財の申請書を国に提出しました。

念願の「文化財」に登録 津屋崎の活性化に貢献

平成19年、藍の家の主屋と井戸屋形が文化庁から福津市第1号の有形文化財として認定を受けました。国登録有形文化財のプレートが届いた際、富美子さんは「プレートを胸に抱えて『やっともらったよ』って報告しながら、藍の家の中をぐるぐると歩き回った。そのとき、2階の柱から『松や二』が、タラッとしているのを見つけて。ああ、やっぱりこの家はまだ生きてるんだって、つい涙がこぼれてし

まった」と、当時を思い出しながら、治さんから受け継いだ遺志を形にできた喜びを語ります。

これを機に、平成20年には「藍の家保存会」と改名し、保存協議会発足当時から活動してきた女性を中心に、津屋崎の活性化に取り組むことになりました。

藍の家保存会の代表として、会員の皆さんとともに、建物の素晴らしさや保存活動の歴史を伝え、訪れた人を温かく迎え入れてきた富美子さん。献身的な活動の甲斐あって、平成26年に福岡発地域ドラマ「ここにある幸せ」の舞台に選ばれるなど、津屋崎の活性化に貢献しました。5年前に代表を退き、現在は古閑由美さんを代表として、新たに歩みを進める藍の家。富美子さんは「これからも、たくさんの人に愛される藍の家であり続けたい」と願っています。



▲藍の家1階が埋め尽くされるほどの人でにぎわった筑前琵琶演奏会【平成9年】

保存協議会事務局長 柴田 治さん



美術教師を32年間務め、退職後、住民運動などに参加し、保存協議会事務局長、つやざきハマボウの会運営委員、恋の浦ウミガメの会運営委員などを務めました。「四季折々の野の花や高山植物、津屋崎町独特のものでありながら、あまりに身近過ぎて気が付かなかった美しい風景や自然そのものなど、津屋崎にしかないものを残したい」と津屋崎をこよなく愛した画家。作品は、宗像漁協津屋崎支所の製氷室壁面など、今も津屋崎のまちに残っています。



▼国有形文化財登録式典。登録プレート披露式(左) コンサート趙国良胡弓のタベ(右)【平成20年】



▶節句人形展で集合写真を撮る保存協議会役員【平成7年】

藍の家 築百二十年 記念イベント 開催

藍の家で、築百二十年記念イベントを開催します。予約は不要です。 問い合わせ 藍の家 ☎52・0605

1 藍の家120歳を祝って

講演
日 時 3月19日(土) 午後1時～
テーマ 「古くて新しい、藍の家再発見！」
講 師 山田由香里さん（長崎総合科学大学工学部教授）

2 特別記念講演会

日 時 4月23日(土)
講 師 藤原恵洋さん（九州大学名誉教授／竹田市文化振興財団理事長／文化審議会世界文化遺産部会委員）

第1部 講演

時 間 午後2時～
テーマ 「私たちはどこからきて、どこにいて、これからどこへ行くのか」～津屋崎千軒、藍の家をめぐるまちづくり先達との出会いと路上物語～

第2部 まちあるきワークショップ(希望者のみ)

建築探偵と歩く津屋崎千軒、柴田治の絵仕事聖地巡り
時 間 午後4時30分～午後5時30分

展 示

期 間 3月10日(木)～3月27日(日)
当時の民具、津屋崎で配られた「引札(広告物)」などに加え、近年まちおこしのために制作された藍染め作品などを展示します。

特集参考資料

- ・津屋崎街並み保存協議会ニュース「はちがめ」（藍の家保存会から借用）
- ・街並み保存協議会記録 ※原田活男さんの活動事績（原田誠さんから借用）
- ・保存活動の写真、その他資料（藍の家保存会、柴田富美子さんから借用）



①藍の家保存会の皆さん②市児童センター FUCSTA^{フクスタ}で藍染め体験。思い通りの藍染めが完成しました③小学生に戸袋の使い方を説明。小学生だけでなく、誰もがその構造と工法に驚きます④郷育カレッジの講師として、市民に藍の家の歴史や建物の素晴らしさを伝えていきます⑤訪れた小学生に藍の家を紹介⑥藍染め体験で出来上がった藍染めを披露



子を取り外して見せると歓声を上げて見入る。藍染め体験では、美しさに笑顔が浮かぶ。その時、自分が今いる地域を誇りに思う気持ちが子どもの心に育っていくのではないだろうか。その思いが大人になったときにまた新しい町を作っていく力になりはしないか。保存活動に注がれた先人たちのまちを思う気持ちが、私たちの次の世代につながっていく。藍の家のことを願っている。藍の家を広く利用していただき、人とのつながりを深めると共に地域文化を掘り起こす活動も続けていきたい。

当時の津屋崎町は保存に積極的ではなかった。古い家は他にもあり、その価値や保存の後の利用についての見通しが良く理解されていなかったからである。そこで協議会は大学の先生を招いて「歴史と街並み」についての講演会を開き、旧上妻邸やその他の古い建物を利用して現代美術館を開館するなどの活動を展開した。街並みの魅力を内外に発信したこと、協議会の熱意が町を動かした。平成6年、建物が町に寄贈され今日に至っている。

地域学習で来館した小学生は、格

先人たちの思いを未来へ
藍の家保存会代表 古閑 由美

津屋崎千軒民俗館藍の家は今年で120歳になった。明治34年に上妻善兵衛さんが建築したこの家は、改築が少なく、明治の町家形式を今に伝える。その価値は福津市で唯一の国登録有形文化財に認定されたことでも明瞭で、隣の豊村酒造と共に昔の津屋崎千軒の街並みをしのばせる。しかしこの建物は平成4年当時は空き家で、解体寸前だったのである。それを知り、地域で「津屋崎町街並み保存協議会」を立ち上げ保存活動を始めた人々がいる。会長の原田活男さん、事務局長の柴田治さん、そして、町の観光協会、商工会、文化協会、区長会や住民団体などの皆さんである。